22100151

International Baccalaureate®
Baccalauréat International
Bachillerato Internacional

JAPANESE A1 – STANDARD LEVEL – PAPER 1
JAPONAIS A1 – NIVEAU MOYEN – ÉPREUVE 1
JAPONÉS A1 – NIVEL MEDIO – PRUEBA 1

Thursday 13 May 2010 (afternoon)
Jeudi 13 mai 2010 (après-midi)
Jueves 13 de mayo de 2010 (tarde)

1 hour 30 minutes / 1 heure 30 minutes / 1 hora 30 minutos

INSTRUCTIONS TO CANDIDATES

- Do not open this examination paper until instructed to do so.
- Write a commentary on one passage only. It is not compulsory for you to respond directly to the guiding questions provided. However, you may use them if you wish.

INSTRUCTIONS DESTINÉES AUX CANDIDATS

- N'ouvrez pas cette épreuve avant d'y être autorisé(e).
- Rédigez un commentaire sur un seul des passages. Le commentaire ne doit pas nécessairement répondre aux questions d'orientation fournies. Vous pouvez toutefois les utiliser si vous le désirez.

INSTRUCCIONES PARA LOS ALUMNOS

- No abra esta prueba hasta que se lo autoricen.
- Escriba un comentario sobre un solo fragmento. No es obligatorio responder directamente a las preguntas que se ofrecen a modo de guía. Sin embargo, puede usarlas si lo desea.

© International Baccalaureate Organization 2010

次の1の文章と2の詩のうち、どちらか一つを選んでコメンタリー（解説文）を書きなさい。

1.

夏期休暇中地方の高等学校から帰省していた三輪与志はその頃鋭い形をとりはじめた或る想念にその表情を酷しくひきしめながらふと立ち止った。十二三の少女が斜めにすれ違いかけたまま立ち止ったのであった。それは背丈の高い、痩せぎすな、扁平な胸部をもった羸弱そうな少女であった。その瞳は大きく見開かれ、化石したような凝視が彼へ向けられていた。高い建物の陰から流れ出た弱い陽射しを少女はその半面にうけていた。少女の頬へさしかかって薄い陽炎をゆらめかせている微弱な光線の凝っと止った鮮やかな形を、その後も三輪与志は刻印されたようにはっきり記憶していた。この斜めの琥珀色の陽射しを彼自身も正面から浴びていた筈なのであった。少女はその位置に化石していた。呼吸を忘れたような鋭いひきつりが咽喉元をかすめ過ぎると、淡黄色の陽をうけた顔色がすーっと紙のように白くなった。病気だなと、三輪与志は気づいた。彼はそのとき卒倒という発作がまるで石塔か何か重い垂直な物体をそのまま横倒しにするように起ることを知ったのである。彼はふいと手を差し出した。その少女が棒のように硬直したまま斜め後ろへのめった瞬間に抱きとめたが、彼はそのとき時間を微細な瞬間へ至るまで一瞬の狂いもなく厳密に分割出来るような気がした。一瞬一瞬に物体としての堅い固定した重みが加わってくるのであった。それは小さな玩具屋の店先であった。彼は少女をかつぎこむとき道路際に陳列してある細い首をもたげた木製の白鳥をがらがらと押し倒し、そして店奥から出てくるあわただしい人影や街路から寄り集ってくる人々から遁れるようにその場を立ち去った。

すると、それから数日後、三輪与志は自宅でそれと同じ現象に遭ったのであった。彼は二階から降りてくると階段脇の薄暗い部屋の扉をあけた。書庫になっているその部屋から本をとり出そうと思ったのである。彼は眼前に何か硝子のようなものがゆらりと浮び上ったような気がした。数日前の少女の痩せぎすな顔が思いがけず彼の眼前にあった。薄暗い光線のなかで白く眼を光らせた少女のほのぐらい輪郭だけが浮んでいた。彼は思わず手を延ばした。すると、あの街上と同じようにその少女は棒のように前へよろめいたのである。

けれども、事態は数日前と違っていた。彼の後方で烈しく飛び上ったような叫び声がすると、彼はたちまち扉の横へ押しのけられていた。

――水……水……。飲ませる水はどこにあるんですの。どうしたのだろう、まあ、この子は？熱があるんじゃないの？まあ、すっかり冷えきっている！早く、早くコップに水を持ってきて下さいな。

三輪与志はこの早口な婦人の叫びに応じてコップを取りに廊下を渡ったが、彼が戻ってきたときには既にその痩せた少女もどっしり肥った婦人も彼の母親や女中達にとりかこまれていた。書庫に入りこんでいたこの少女が挨拶につれられてきた津田家の一人娘、津田

安寿子なのであった。予想せぬ発作のため、三輪家の家内への挨拶も行われず彼女達は立ち戻らなければならなかったが、それこそ三輪家と津田家の間につづけられた連綿たる関係に一つの結末をつける異常な結合の開始だったのである。

女学校へ入ったばかりの幼さでもはやヒステリーが起ったのかと、津田夫人は不安になった。目まぐるしい大都会へ移ってきたのでその早期な発生が促されたのかと考えられたが、それにしても津田安寿子は奇妙な行動ばかりとった。理由を訊いても彼女は白い眼を光らせたまま、頑なに返事もしなかった。そして、離れの部屋に何時までも黙って閉じこもっているかと思うと、思いもかけぬときに急に肩を顫わせてとめどもなく泣いた。顔色から血の気が消え失せて、わずか二三日で首筋がげっそり瘠せてしまったように見えた。津田夫人は、熱病にうかされたような、といっても確かな病気とは認められぬ理由も知れぬ一人娘の症状にまず当惑し、なだめすかしたあげく、その理由を探り出すと、その場に殆んど飛び上ったのであった。

それは、わずか十三歳の少女の古風な恋患いなのであった。そしてその相手が偶然にも三輪与志だったのである。十数年にわたる地方生活を終りこの首都へ戻ってきてから一週間も経たぬ裡に起ったこの出来事は、津田夫人を呆然たる自失状態へ陥らせた。けれども、謂わば奇蹟的なこの出来事は、より密接な関係を本来持つべくして未だ最近まで持ち得なかった三輪家と津田家のひとびとに話題豊富な哄笑と歓喜を呼び起したのである。彼等の婚約は直ちにとりきめられた。ひとびとは古くから両家に伝わりつづけた特有な親和力を論ずる一種の夢心地に酔っていた。十三の少女の恋患い――そこから連想されるこの出来事の異常な性格はそのときいささかの顧慮も検討もされなかったのである。

（埴谷雄高『死霊Ⅰ』一九八一年、一部を現代仮名遣いに変更。）

（注）羸弱（るいじゃく）身体などが弱いこと。
哄笑（こうしょう）大笑い。声高に笑うこと。

－ 与志と安寿子は、それぞれどのような人物として描かれていますか。

－ 二人の出会いはどのように描かれ、抜粋文の中でどのような意味が与えられていますか。

－ この文章の文体、調子、雰囲気などにはどのような特徴があり、それはどのような効果を生じていますか。

2.

懐(なつ)かしのわが家

昭和十年十二月十日に
ぼくは不完全な死体として生まれ
何十年かかって
完全な死体となるのである
そのときが来たら
ぼくは思い当たるだろう
青森市市浦町字橋本の
小さな陽あたりのいい家の庭で
外に向って育ちすぎた桜の木が内部から成長をはじめるときが来たことを
子供の頃、ぼくは
汽車の口真似(くちまね)が上手(うま)かった
ぼくは
世界の涯(は)てが
自分自身の夢のなかにしかないことを
知っていたのだ

(寺山　修司「なつかしの我が家」一九八三)

– 詩人はどのような心持(こころも)ちで、幼い頃をどのように語っていますか。

– 桜の木はどのようなイメージで語られ、作品の中でどのような意味を託(たく)されていますか。

– この作品の調子、文体の特徴について、それがどのような効果を持っているか、あなたの考えるところを述べなさい。